

## 平成30年度第2回公立大学法人宮城大学評価委員会 会議録

日 時： 平成30年8月24日（金）午前10時から正午まで  
場 所： 宮城県庁 行政庁舎 9階 第一会議室  
出席者： 別紙のとおり

### 会議の内容

#### 【1 開会】

(司会)

ただいまから、「公立大学法人宮城大学評価委員会」の平成30年度第2回会議を開催いたします。

#### 【会議の成立】

(司会)

本日は、伊勢委員から所用により欠席する旨の御連絡をいただいております。委員6名中5名に御出席をいただいておりますので、条例に規定する委員の半数以上という定足数の要件を満たしており、会議が有効に成立しておりますことを御報告申し上げます。

#### 【2 挨拶】

(司会)

それでは、開会にあたりまして、宮城県総務部長の伊東から御挨拶を申し上げます。

(総務部 伊東部長)

皆様、大変お忙しい中、御出席をいただきまして本当にありがとうございます。

また、前回第1回目の委員会におきまして、委員の皆様には評価書の御記入をお願いしたところでございますが、本当に短い期間にも関わらず、多くの貴重な御意見を頂戴いたしましたことについて、重ねて御礼を申し上げたいと思います。

皆様からいただいた御意見に基づいて、平成29年度の業務実績に対する評価案を作成いたしまして、本日の審議資料として準備をさせていただいております。本日の委員会では、この評価案をもとに御審議をいただきまして、平成29年度の業務実績に対する評価のまとめをお願いするということとなります。

前回の委員会に引き続きまして、本日もぜひ御忌憚のない御意見をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

#### 【3 審議】

(司会)

それでは、早速ですが議事に入ります。

中島委員長、よろしく願いいたします。

【会議の公開について】

(中島委員長)

まず、今回の会議の公開について確認しておきたいと思いますが、公開ということによろしいでしょうか。

(「異議なし」の声)

(中島委員長)

では、異議がないようなので公開とします。

では、次第に沿って審議を進めますが、まず本日の配付資料の確認を事務局からお願いします。

(事務局)

(資料1～3に基づき事務局から説明)

(中島委員長)

ありがとうございました。

【平成29年度業務実績評価について】

(中島委員長)

それでは、審議を進めていきたいと思います。

本日の評価委員会で評価結果を確定することになりますので、よろしくお願いします。

事務局資料1として皆様の御意見をまとめたものがありますが、簡単に説明をお願いしたいと思います。

(事務局)

(資料1に基づき事務局から説明)

(中島委員長)

ありがとうございました。確認ですが、この評価結果が公表されたときに、「評価する」という部分は良いのですが、「何々すべきである」というような意見は、今後の大学運営にどれくらい拘束力を持つと考えますか。

(事務局)

委員会の御意見としていただいたものについては、特段「評価する」というプラスのものだけ抜き出して書くということはありませんで、今後に向けた御意見ということではいただいたものについても記載しております。何らか義務的なものが発生するわけではございませんが、評価委員会からいただいた御意見・助言として記載をしております。

(中島委員長)

意見は記載するけれども、拘束力はないということですね。

(事務局)

できるだけ努力をしていくということで、受けとめたいと思っています。

(中島委員長)

こういうことを申し上げるのは、委員会も言ったことに対する責任を持たなければいけませんので、大学として受け入れられる提案と、受け入れがたい内容というのがあると思います。理事長、いかがですか。

(川上理事長)

単年度で実現できるかどうかは別としまして、また中には、目標の設定にも関わる問題もありますので、時間はかかるものもありますが、対応するつもりでおります。このことは最後に申し上げるつもりでしたが、概括的に申し上げればそういうことでございます。

(中島委員長)

わかりました。では、このままで進めさせていただきたいと思います。

それでは続きまして、質疑事項に対する回答について説明をお願いしたいと思います。

(川上理事長)

資料3、これは順次担当のほうから御説明したいと思います。

(徳永理事)

それでは、1番から御説明させていただきます。ハラスメント相談室は設けているのか、ハラスメント教育はどのように行っているのかという御質問でございます。

我々としては、ハラスメント相談室という形ではないんですけれども、人権侵害の防止に関する規定に基づきまして、人権相談窓口を設け、教職員から構成する相談員を配置しております。また、学外の相談窓口へも相談可能であること、あるいはどういうものがハラスメントに当たるのかといったようなことを含めて、入学時のオリエンテーションのときに学生へ周知、教育を行っているところでございます。

(金子理事)

通し番号2番の、日本で働きたいという学生への就職支援はどのように行っているのかという御質問でございますが、本学の国際交流・留学生センター、入学後1年生の段階からコンタクトがあって生活面をよく知っているセンターでございますが、そのセンターと、それから今年からできましたキャリアインターンシップセンター、この両センターが相談に乗ります。個別の求人サポートは一般学生同様にキャリア開発室が行っております。

(徳永理事)

3番でございますが、秋のオープンキャンパスの来場が低迷したことの分析はどうかという御質問でございますが、それまで大学祭と同時開催だったんですけれども、それを単独開催としたということ。それから、当日雨が降ってしまったこと。また、一部高校の試験期間と重なってしまったことなどが影響したのではないかというふうに考えております。

なお、夏に比べて秋のオープンキャンパスの来場者はずっと少なく、大体5分の1か、場合によっては10分の1近く少ないということがございました。また秋の開催のときの主な対象でありました高校1、2年生は夏の開催のときにも来ていただけているということもわかりましたので、30年度、今年度からは夏のオープンキャンパスに一本化するということで、内容を充実させて実施することになりました。

(金子理事)

通し番号4の20でございます。他大学との連携は、県立大学同士の連携が基本となるのかという御質問でございましたが、他大学との連携につきましては、本学の教学面でのニーズ、シーズに適合するプログラムが組める相手であるかどうかを原則に考えておりまして、特に連携する先を県立大学に限定するものではございません。実際に、学都仙台コンソーシアムの参加を通じまして、県内のほかの国公立や私立大学とも連携した取り組み等、公開講座が主ですが進めております。

(高橋理事)

それでは、おめくりいただきまして、2ページを御覧いただきたいと思っております。通し番号の5番でございます。

職員、教員の男女率、職位別の男女率の御質問をいただいております。

まず、職員についてですが、上段のほうを御覧いただきたいと思っております。職員数64名の内訳でございますが、男子が64%の41人、女子が36%の23人となっております。職位別につきましては、グループリーダーとして、この4月から初めてプロパーの女子職員を2名登用したところでございます。

続きまして、下段、教員についてでございますが、137名の職員のうち、男子が64%の88人、女子が36%の49人となっております。職員別の内訳は記載のとおりでございます。女性の登用率は36%と記載しておりますが、看護学群を除きますと14%となります。

看護学群では助教として5名の男性教員を登用しているところでございます。

(金子理事)

続きまして、通し番号6番、新カリキュラムの導入初年度の分析はどうかということでございました。

新カリキュラムの導入初年度に該当するのは基盤教育がほとんどでございまして、授業評価の結果をもとに、科目ごとに「授業の計画・運営」「時間割編成」「学習環境」なかなか見えない「事前事後の学習」等の項目別に評価分析を進めました。

その結果、フレッシュマンコアと本学で呼んでいます新しい科目の少人数グループの学習や、ディスカッション等のアクティブラーニングの導入に関しては、高い教育効果が得られたと本学では評価しております。その一方で、土曜日に集中で開講いたしました地域フィールドワーク、これもフレッシュマンコアのコア中のコアでございますが、それらについては開講曜日等の問題が大変不評でございます。そこから授業計画や、開講曜日等の変更、改善策を策定しまして、本年はそれを実行いたしました。また、そのフレッシュマンコアの科目分野別にFDをしまして、テキストの更新や、科目シラバスの見直しはかなり推し進めました。

あとは、学生の学修行動を経年で比較分析しようということで、今年度から、お茶の水女子大学が主管で12大学がやっている「教学IRコモンズ」によって、学修行動調査を試行しようとしております。

(川上理事長)

今のところ、フレッシュマンコアの地域フィールドワークについてでございますが、土曜日から水曜日に移してございます。学生のほうも不評だったんですが、地元、地方自治体の職員の方にも御協力いただくという観点から、土曜日開催というのは、やはり向こう様にとっても負担だったので、水曜日開催としてございます。

それから、もう1点、吉沢委員から危機管理の問題についての御質問をいただいております。資料1の17ページの第6のところ、「情報管理については、留学生の受け入れ、学生、教員の海外研修等を積極的に行っていく中で、学外への持ち出し等に対する危機管理が必要である」という旨の御指摘がありました。

最近、大学における情報の管理、留学生に対する情報の管理は厳しくなっております。本学もその点は認識をしてございます。そういう観点で、研究委員会などを通して、学生や教職員の意識向上に努めてきてございます。ただし、東北大学と比べると、密度は低いのが現実でございます。今後の研究の進展に応じて、国内国外における事例を勉強していきまして、防止策を具体的に作っていくということに取り組んでいきたいというふうに考えてございます。

以上でございます。

(中島委員長)

ありがとうございました。今、回答について説明いただきましたが、委員の方からさらに質問がありましたらお願いします。

特にないようでしたら、次に進めます。

資料1の宮城大学の業務の実績に関する評価結果に入りたいと思います。

まず、評価の分かれている項目について個別に確認したいと思います。この点について、事務局から説明をお願いします。

**【評価が分かれている項目等について】**

(事務局)

項目別評価のうち、3人と3人の半数に評価が分かれる項目はございませんでしたが、2人と4

人に評価が分かれている項目が3項目ありましたので、御説明させていただきます。評価が5人と1人に分かれている項目につきましては、後ほど項目を限らず、皆様から自由に御意見をいただく時間がございますので、その際あわせて御審議いただければと思います。

評価が分かれた項目の1つ目として、資料1の2ページと、資料2の1ページをあわせて御覧ください。項目番号1「イ 学士課程」について、B評価が4人、C評価が2人となっており、評定案としては、B評価と記載しております。前回、機械的な評価としてお示した仮評価ですとC評価でしたので、評価が1段階上がっています。法人の業務実績報告書によりますと、外国人留学生の受入実績について、自己評価をⅡとしているものの、その他の学士課程全体に係る入学者受入方針・入学者選抜に関する目標を達成するための措置については、自己評価はⅢであり、年度計画を予定どおり実施しているとされています。

次に、資料1の同じく2ページ目下段、資料2の1ページ目下段の、「ロ 大学院課程」を御覧ください。B評価2人、C評価4人であり、評定案は仮評価と同じCとしております。法人の業務実績報告書によりますと、「ロ 大学院課程」に係る自己評価4項目のうち2項目について、「年度計画を十分に実施していない」とするⅡとしており、大学院の出願数が入学定員を下回る状況である点を課題としています。

最後に、資料1の8ページ、資料2の10ページの、項目番号20「大学間及び高等学校との連携」を御覧ください。S評価2人、A評価4人であり、評定案は仮評価と同じAとしております。法人の自己評価は全てⅢ及びⅣであり、特に、兵庫県立大学との連携のもと実施している「コミュニティ・プランナー」育成の取組みについて、自己評価をⅣとしています。委員の皆様からも、「他大学との連携が結果を出して評価できる」「公立大学ならではの取組みがさらに発展し、それが全国に発信できると良い」など、「コミュニティ・プランナー」の取組みについて評価、今後への期待の御意見をいただいています。

事務局からの説明は以上でございます。

(中島委員長)

ありがとうございます。順番に議論していきたいと思います。

まず、資料1の2ページの項目番号1、学士課程についてということで、今御説明がありましたように、仮評価はCだったんですけども、Bを付けた人が4人いるということで、この件についてBに上げてよいかということを御審議いただきたいと思います。

(橋本委員)

私はCを付けました。意見にも書きましたが、留学生数の目標は、もともと現状では無理のある計画だったかなという印象を持っております。もし今の目標のままでいくのであれば、かなり抜本的、大々的な取り組みをしない限りは無理ではないかと。そういうことで仮評価に引きずられた形でCといたしましたけれども、全体のタイトルが「学士課程」ですので、そういう意味では選抜方法、受験生を集める努力は十分されていたと思いますので、B評価でもよろしいのではないかと考えております。

(中島委員長)

ありがとうございます。資料1の最初のところに、A B C Dの基準が書いてありますけれども、全て順調にいったらAで、若干遅れているのがB、もうちょっと遅れているのがCと、程度問題のことだと思います。Dはかなり改善しなければいけないという警告になりますけれども、その意味で今おっしゃっていただいたように、外国人の問題はあるけれども、全体的に遅れているのではないということでBでもいいのではないかと、そういう判断になるかと思いますが、それよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声)

(中島委員長)

ありがとうございます。では、項目番号1、イの学士課程の評価については、原案のとおりBと決定するというようにしたいと思います。

では、次に、2ページの下段、項目番号2のロ、大学院課程についてということで、これはCが4人、法人のもともとの原案がCだったんですけれども、Bに上げた方が2人いらっしゃるということで、御審議いただければと思います。

このまま基本的にいくとCになるというのが案なのですが、特にBの伊藤委員から何か御意見ありましたらお願いします。

(伊藤委員)

入学者数が定員に対して大きく下回っている要因を明確にすべきであるという意見を記載しつつ、評価は1ランク上げて書いています。

(川上理事長)

少し要因について御説明をさせていただいたらというふうに思います。要因は多分たくさんあると思いますが、この地におきましてはやはり東北大学があって、そこに大学院生がたくさんいますので、東北大学と違った形でいかに本学の教育研究のレベルを上げていくかということが、一番根本的な問題として尽きるというふうに思います。

しかし、そればかり言っていたら、いつになってもたどり着けませんので、やはり要因を細かく分析をしていきますと、もともと本学に入学する学生は、早く社会に出ようということをもともと持って入学しているのが一般的だというふうに思います。したがって、4年間の教育をいかにしっかりやるか、それによって社会にちゃんと巣立てるというのも、本学の理念としてやってきていることだと思います。その結果として、現在、就職率も非常に高い状態ですから、どうしても学生が就職のほうに向いてしまうという、これが現実のまず1番目だと思います。

それに対して打ち勝っていくということになると、やはり、いかに大学の中の大学院の魅力をつくっていくかということで、このためには研究力の強化が非常に重要な問題だと思います。それから学費と生活費をどう補えるか。奨学金の取得率が決して低いわけではないので、大学院に行けば奨学金でカバーはできるわけですが、やはり金銭的な支援策というのもまだまだ考えなけれ

ばいけない内容だというふうに思っております。

さらに、ロールモデルが存在していないという面もあると思います。一つの研究室において、どんなに多いところでも大体1年に1人くらいしか行けない、行っていないという現実があります。そうなりますと、学生は大学院に行くとしても孤立してしまっ、将来の展望を描くというのが難しいということがあります。そういった面でも全体のボリュームを大きくすることによって、キャリアイメージというロールモデルが確立されるように努力をしていくという課題もあろうかと思ひます。

また、良い学生ほど東北大学の大学院に流れたりするという現実もござひます。それに対して大学の中に引き止めようと思えば、これも質の向上ということに尽きるわけござひます。

さまざまな課題があつて、それに対しては一つ一つ手を打つていくという姿勢を持ち続けてやっていきたいと思ひます。究極は、いかに東北大学というものがある中において、宮城県にある大学としての特徴を持ちながら、教育研究の質を上げていくか。これに再度最終目標として取り組んでいくということに、結局なろうかと思ひます。努力はいたしますが、看護についてはロールモデルがありますので別ですが、事業構想と食産業学については定員を満たせていないという現実があるというのは事実ござひます。

(中島委員長)

もう一人のBは私なのですが、これは、はこだて未来大と、それから札幌市立大の2校の経験からいって、ある意味シンパシーを感じてBということだす。現実を見るとCだす、川上理事長がおっしゃつたさまざまな理由により、なかなか難しいということもわかります。それに対して努力されているので、Aでないことは確かだけれども、Bぐらいでいいんじゃないかなと思つたという次第だす。

特に、北海道だすと、経済的理由で大学院の修士課程の2年間待てないという家庭がたくさんあつて、本人は行きたいんだけども行けないという場合があるので、なかなか一気に解決というのは難しいかなと思つているところだす。

もう一つの解決方法は、定員を減らせばいいんですけども、これをやると文科省は大学院の定員に応じて教員の数を決めてますから、いわゆるデススパイラルに入つてしまふ。どんどん研究もできなくなつてくるということなので、やはり定員は確保しておきたいというのがはこだて未来大にいた頃の意向だす。公立大学ほぼ全般に見られる現象で、直ちにAにするというのはなかなか難しいかなということだす。そういう意味で、BになつてもCになつても、現状としてはそうせざるを得ないという評価であることは確かなので、多数決を取るとCかなという感じだすけれども、いかがだすでしょうか。

(齋藤委員)

私はCを付けましたが、構造的な問題が非常に多過ぎて、個別の大学がどうこうという話というのはほとんど余地がないというふうな実感を持っています。私の勤めている大学でも、大学院の定員未充足というのは構造的な問題で、どんなに努力しても、授業料をただにしたら学生が集まるかという、それでも集まらないという状況だすよね。打つ手がない状況を考えれば、Cしかないんじ



やないかなど。

(川上理事長)

すみません、少しお話をさせていただきたいんですが、確かにおっしゃるとおり構造的な問題があるんですが、本学においてはまだまだ努力をする余地はあっております。

特に、まずすぐにやらなければいけないのは、やはり研究力の向上だと思います。公立大学の中を捉えてみても、研究能力は決して高いほうではないところだと思います。丁寧な教育をしているというのが我々誇っていることで、それにやはり人的能力も相当使っているもんですから、研究に回ってないという実態もあります。そうは言っても、大学として存立していくためには、新しいことを見出して、それをやはり学生に伝えていかなければいけない。これは当然のことなので、引き続き努力をしていきたいと思っています。その延長として、大学院生の確保を図っていききたいと思っています。

(中島委員長)

それでは、評価としてはCでよろしいでしょうか。

(伊藤委員)

よろしいですか。大学院は東北大、東北大の方は東大へと進学する方も多いんでしょうけれども、結局宮城大学としてのロールモデルを、もう少し具体的に子供たちに、つくるというよりも提案する形はいかがかと思いますが。

(川上理事長)

そういった面では、御意見いただいている内容に関係してきますけれども、発信力がやはり弱いというふうに思います。教員はちゃんとした研究をやっているんですけども、そのことを、近づいてきた学生よりも、もっと手前の段階からしっかり伝えるということは必要なのではないかとこのように思います。研究室に入ってくれば、教員と学生の関係というのは出来上がるわけですけども、その前の段階から魅力を発信をして、大学に入ってくる学生に早い段階から、大学院という路線があるということを多くの学生に理解をさせるということが必要だと思います。そういった面で、中島委員長からも御指摘をいただいている、保護者に対してということは全くやれておりませんでした。年に1回サポーターズデーといって、保護者に集まってもらう機会もありますので、そういった機会も活用して、大学院についても情報提供するということが、なるべく早い段階から大学院教育についての意識醸成をするということについて、できることをやっていきたいと思っています。

(中島委員長)

この前も申し上げましたが、経団連が生涯賃金のデータを持っていて、大卒と大学院卒で随分違うというのを保護者に見せると、結構効果がありました。

(吉沢委員)

東北大の話題が出ましたけれども、私たちのほうもかなり努力はしてはしまして、特に私がいる看護というのはやはりそのまま就職する率が高く、ほかから比べるとなかなか大学院率が上がらないというところで、高校生の時点から、この大学に入るということは大学院までつながることなんだよとか、それから学部の1年生から既に大学院を目指すような教育というのを進めていくという形があるので、本当に、インフォメーションしていくということは大事だと思います。

そしてもう一つ、「出口が見える示し方」という形の意見を記載したのですが、例えば先ほど最終的な年収というお話がありました。この大学院に入って、そしてその後に就職するということがどれだけのメリットがあるのかということが見えないと、やはりなかなか大学院には来ないというところがあると思います。看護の場合だと、大学院に行ってもう一つ資格が取れるとか、そういうことが一つ引き金になっているということもあるので、ほかのところにおいても、大学院の中でプラスアルファの資格を持って卒業していくというふうな形を考えていくということも大事なのかなというふうに考えていますので、参考にしていただければと思います。

(中島委員長)

いろいろなアドバイスがありました。

評価はCということでよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声)

(中島委員長)

ありがとうございます。

では、続きまして、資料1の8ページ、項目番号20、大学間及び高等学校との連携について審議したいと思います。もともと大学の自己評価はAだったんですけども、Sが2人ということで、橋本委員と吉沢委員から少しお話しいただければと思います。

(橋本委員)

私はSを付けました。CPプログラムが高く評価されたということと、それから補助事業としてのプログラムが終了後も学内の人材育成カリキュラムとして発展、定着しつつあるところは非常に高く評価したつもりです。なかなか補助事業というのは、補助金が終わればそれでおしまいということが多々あるように聞いておりますので、そこを学内の教育プログラムにつなげられたというのは、本当に補助事業の意味があるすばらしいことだったと思っております。

(吉沢委員)

今世の中で大学との連携ということが非常に重要で、そこから地域をどう活性化させていくということも非常に重要視されている中で、既に先駆けてこういうことがやられているというところは、非常に評価すべきところではないかと思いました。

(中島委員長)

今の議論を聞いていて、私もSに変更しようかなと思っているんですけども。

(川上理事長)

その辺、少し補足をさせていただきたいと思いますが、コミュニティプランナーのプログラム、5年間一生懸命やってまいりました。終わった後で引き続き、拡大をする形でやらせていただいています。これは当然地域にある大学としての義務だということで、人口減少していく宮城県及び東北地方のコミュニティーをどうやって維持するかと、非常に重要な課題に取り組む人材を輩出するというところに力を入れているところです。

ということではあるものの、それを大学だけでできることではなくて、文科省からの支援が終わった後、県から特別に運営費交付金を追加していただいております。そういう県の支援をいただいて、続けることができしております。その間に、大学としてもこれをさらに発展する方法がないかということは、引き続き検討していきたいと思います。県の支援をいただいているということが、これを続けていける非常に大きな要因になっておりますので、この場をかりて県にも感謝申し上げたいところでございます。

(中島委員長)

先ほど私、Sに変えると言いましたけれども、基本的に川上理事長が来られたときに、大学の自己評価を随分下げられたんですよね。それまで結構Sが多かったんですけども、ちゃんと厳しく評価してやっていきたいということで。今年Sがなくなってしまっているという意味からも、ここをSにするのが妥当かなという気はしています。

(齋藤委員)

客観的には恐らくまだSは時期尚早のような気がします。つまり、このようなプログラムは補助が終わって、その後アフターフォローをどうするか、5年くらい様子を見て、確かにあの補助金が元となって、いいプログラムとしてテイクオフして実績上げた、というふうに見るまでは、少し時間が欲しい。しかし、今後も県の補助金をずっと付けてもらうということを、この委員会として応援しましょうという視点に基づきSに変更するのは可能です。

(中島委員長)

そういう意味では、今の、資金についてのコメントを書き足した上で、Sにする方法はありますよね。実際はこだて未来大の場合も、国の補助で3年間、その後市からそれを予算化してもらって続けている取り組みがありますので、やはりそういう形になっていかざるを得ないというか、なっていくのがいいのかなと思います。コメントを付け足してSにするということではいかがでしょう。

(「異議なし」の声)

(中島委員長)

ありがとうございます。では、ここをSに変更するということで決定したいと思います。

#### 【自由発言】

(中島委員長)

これで大きく分かれた部分はこれで終わりなので、あとは皆様から御意見、御関心がある部分について自由に発言していただきたいと思います。特に5対1に分かれて、私は1なんだけれども、これはぜひ言っておきたいというところがあれば、この時間に言っていただければと思いますので、自由をお願いします。

(橋本委員)

私はNo. 3の学士課程、教育の内容に関する目標を達成するための措置でSを付けました。28年度の入試改革から始まって、29年度に学群・学類制がスタートして、基盤教育に力を入れるという形は整ったというところが、非常にうまくできたのではないかと資料から読み取りました。

そして、またこういった新たな改革に関して、組織としてのPDCAサイクルがきちんと回っているのではないかというふうにも読み取れました。もちろん個々に問題は出てくると思いますけれども、そこを点検して将来につなげるというのが非常に重要なことだと思います。

それから、大学の先生方は、先ほども出ましたけれども、やはり研究と教育という似て非なるものの両面を抱えているというところから、他の組織と違って、教育を組織的にするとき先生方をまとめるのが難しいのかなという印象を持っております。宮城大学は比較的新しい大学ですので、旧来のいわゆる大学の先生という風土からは少し離れているのかもしれませんが、それでもやはり教育に関してこれだけ組織的にできるというところを、私は高く評価しました。先ほどの川上理事長のお話では、丁寧な教育をする一方、やはり研究意欲に課題がというようなことが言われましたけれども、なかなかその両方をというのはかなり大変なことだなという印象は持っております。

(中島委員長)

研究と一言に言っても、いろいろあると思っています。端的に言ってしまうと、国立大の研究と、公立大の研究は違うと思います。そういう意味で、宮城大モデルの研究というのをぜひ確立していただいて、それを頑張る、それは論文を書くことに限らないと思います。

フレッシュマンコアについては、齋藤委員も評価されていましたが、いかがですか。

(齋藤委員)

今、お話がありましたけれども、PDCAが回っていくのが今から本格化しますから、必ず問題が出てきます。それをどういうふうに持続的に展開していくのか、初心を忘れず、しかし変更するところはいかに現実的に変更していくかというハンドリングが今から試されることになると思います。でも、始まって今はうまくいっているという点については、非常にいいことだと思います。

それから、設備とも関係しますけれども、アクティブラーニングと、それからラーニングコモンズという設備の問題というのは、車の両輪のようなものですから、それは両方意識しながらやっていかなければいけないという感じがします。

(中島委員長)

この件、ほかに御意見は。なければ、このままの評価になりますけれども、よろしいでしょうか。

(川上理事長)

フレッシュマンコアを導入して、特に地域フィールドワークというのがそのうちの大きな柱です。先ほど金子のほうから御説明したとおりで、しっかりとPDCAを回して改善していくつもりでございます。

私も2年にわたって地域フィールドワークの現場に実際行って、見てきておりますが、まだ開発途上だと思しますので、改善に努めていきたいというふうに考えてございます。

(中島委員長)

こういうアクティビティーが研究になると、とてもいいと思います。

(川上理事長)

その言語化がなかなかできていないのが、この大学の問題と考えています。多分教員のノウハウとしてはちゃんとたまっているんだと思うんですけども、なかなか言語化できていません。

(中島委員長)

では、ほかに何かありますでしょうか。

皆様からの意見について、吉沢委員から看護の論文が少ないのではないかという話が出ていたんですけども、いかがですか。

(川上理事長)

論文というベースで考えたときの宮城大学の現状というのは、国立大学、公立の中でもほかの大学に比べて決して誇れるものではないということで、その目標がちょっと低いんじゃないかというのは、現状あると思います。その中で、看護については、やはり実習の負担などがありまして、教育の負担が大きい点がまず一つあります。

それから、看護の場合には、独立一人でというよりもチームワークになっているものですから、共著論文になるという事情もあり、目標値が他に比べると低いということが現状として出てございます。先ほど申し上げましたように、研究能力を高めるということは重要なことだというふうに思っていますので、一步一步ちゃんと積み重ねていきたいと思っているところでございます。

(吉沢委員)

実習の負担というのは、私も看護にいますので、同じような形になっているんですが、構成人数を見たときには、東北大の1.5倍の人数がいらっしゃいます。宮城大さんは優秀な先生方がそろっているのもう少し設定を高めてもよろしいのではないかと思います。実習が大変だから、ということが、ある意味理由にならなくなっているというのは既に言われてきていることなので、そうす

るともう少し、どういう教育の方法にして、教員が研究等々にも割ける時間を多くするのかということを考えていかななくてはいけないということで書かせていただきました。

(武田理事)

確かに人数的にはおまして、ただ、言い訳になってしまうかもしれませんが、5分の2が若手、助教になっております。その中で、修士以上の学位を持っている者というのも決して多くはないという現状がある中で、学内的に若手の人たちを育てていく土壌をもっとつくっていかねばいけないなというふうに思っています。ここを強く感じているところではございます。そういったところで人数割をすると、吉沢先生が計算してくださったような実態になっているところです。それから、紀要を廃止してしまったという経緯がございまして、それまで若手の人たちも頑張って論文を出していたんですけども、学術誌になってきますと、なかなか採択率は厳しい状況の中で、論文数が確実に減ってしまったという現状があります。この年度計画というのはこれを立てる段階で、その現状に合わせた目標にしてしまっているというところがあります。

ただ、それに甘んじずに、やはり若手をもっと育てる努力、そういう体制づくりというところ、紀要を今度全学的な研究誌というような形でやっていこうという流れになっておりますので、その流れに乗って体制を整えていきたいなというふうに考えております。

(中島委員長)

札幌市立大にも看護学部があり、やはり論文が少ない状況というのは見られます。先ほど川上理事長が「言語化」とおっしゃいましたけれども、そういう努力はしていかなければいけないだけけれども、必ずしも従来の意味の研究論文にする必要はないというふうに思っています。

ちょっと脇の例なんですけれども、情報処理学会でプログラムやシステムを扱ってる人たちも同じ問題を抱えていて、いわゆる研究論文を書けない。システムをつくりましたというのは書ける。ということで、情報処理学会ではプラクティスという論文誌がつけられました。何か学会でそういう動きをするというのも、一つの手かなと思います。看護全体の盛り上げのためにという意味ですけども、そういうことも考えられるかなと思います。

では、ほかにありましたらお願いします。

(齋藤委員)

最後のところに書いたんですけども、入学者が増えているし、卒業者はみんな就職しているし、ちゃんとした教育をしているし、何も問題ない大学だというのが基本的な認識なんですけれども、気になったのが設備に関して、学生が卒業時に、教室と食堂は満足度が低いというふうに答えている。これは学生からすると二大拠点です。大学の立地からも、ほかで代替できないわけですよね。

それからキャンパスもできてから年数がたって、そろそろキャンパス全体についてちゃんと考えなければいけない時期です。それはお金もかかることだし、県と相談しながら、魅力のある大学をつくるということが、理事会的には今からの重要な課題になってくるんじゃないかという全体認識を感じています。

(川上理事長)

まず、幾つかに分かれると思うんです。一つは広さの問題です。開学当時に比べると、大人数をまとめた教育が増えているというのは事実としてあります。というのは、宮城大学は最初は実践的な能力育成ということで、それぞれがどんどん細分化をしていったわけです。それに対して今度は基盤教育、共通教育ということで、比較的大きな人数で講義をすることになるので、当初考えていたものに対して、大きな教室の不足感というのがあります。その中には例えば音響設備が開学当時のままで、ブラウン管のディスプレイがかかっていたりするものですから、それについては県から交付金をいただいて今年度改修をするということで、学生の満足度を上げていきたいと思えます。

それから、20年たつということになると、次に出てくるのは空調の問題でございます。これも今年度改修工事を進めておりまして、空調をよくして、アメニティーを高めていきたいというふうに思えます。

それから、3つ目は、食堂や生協の問題というのが出てまいります。これも構造的な問題でして、円形の建物の中で、どうやってスペースを取るかという問題があります。しかも学生たちを教育しようとするほど、時間が詰まっていきますので、お昼休みの50分間に全員の食事を取らせなければいけないなんていうことにもなります。そうなってくると、やはりなかなか根本的な解決策はありません。それでもやはり、生協の間では営業時間の延長や、メニューの多彩化の交渉はしてございます。今まで大和では、100メートル歩いたところの交流棟に生協があったのを本館に移して、学生がすぐ利用できるようにして、売上高も上げるというような努力もしていますので、これからも運営事業者である生協との間で学生の満足度が上げられる方法ということについても努力をしていきたいと思えます。

(中島委員長)

そういう意味では、来年度1回ぐらい大学で委員会を開催するというのは難しいですか。

(事務局)

来年度の1回目を基本に、検討させていただきます。

(川上理事長)

ラーニングcommonsの拡張工事を今やっております、今年の夏休みを区切りに、ある程度の形が整うようになってございます。来年度になれば、また新しい御報告もできると思えますので、ぜひ来年度、本学で一度会議をやっていただければというふうに思えます。

(中島委員長)

よろしくお願いします。ほかの話題で何かございますか。

なければ、そろそろまとめに入りたいと思えます。

基本的に原案から変更したのは、項目番号20番をSに上げたということです。よろしいでしょうか。

では、そのように最終決定とします。

最後に川上理事長から一言お願いできればと思います。

(川上理事長)

2番につきましてCという厳しい評価を頂戴しましたし、それから外部資金の獲得についても課題を御指摘いただいております。この2つは、ある意味共通の根っこを持っている、重要な課題だというふうに思っています。

今日御説明していますフレッシュマンコアというのは、私の前任者が認可を取って、私が入ったときに始まったことですので、まずはこのことを定着させていくということに努力をしてきたわけでございます。2年目に入って、まさにPDC Aを回してよくしていく流れをつくってきたわけです。

したがって、その次に来るのは、大学院と外部資金ですが、共通の根っこは研究力ということになります。中島委員長がおっしゃるとおり、国立大と同じような研究をやっているのかというのは、そういうふうには思っておりませんが、そうは言うものの、ちゃんとした言語化をして成果として公表して、それを世の中に伝えて、世の中が利用できるという形までもっていかねばいけませんので、それについてはまだまだ課題がたくさんあると思っております。

今日御説明がなかなかできませんでしたが、そのために地域連携センターの改組を今年度初めにやって、コーディネーターを置いて、今までどちらかというと地域連携センターは市町村から委託を受けて、調査活動をやってお返しするというようなところが中心でしたが、必ず学内に展開して、教員、学生が参加して、より深い課題解決に対する提案を、市町村及び産業界に向かってできるようにするというので、手を付け始めたところでございます。一朝一夕で解決すると思いませんが、そういう形でしっかりと研究を行い、かつその成果を発信していくということに取り組んでいき、それによって今回C評価をいただいたものの改善をやっていきたいと思っております。

また、Sに変えていただいたコミュニティプランナーでございますが、コミュニティプランナーを初めとした大学同士の連携及び高校との連携、これは大きな項目で捉えますと、CPだけではなくて、ほかにもあるわけでございます。この点についても宮城大学はご覧のとおり分野も限られていますし、規模も小さい大学ですので、大学の中だけにとどまっていたら大きな仕事はできないと思っておりますので、他の大学との関係性、これを強化していきたいと思っております。

また、18歳人口がこれから急減していく中では、高校との関係づくりということも非常に重要な課題だと思っております。アカデミックインターンシップというものを数年前からやっております。高校の段階からうちの大学に来てもらって、大学の雰囲気や理解をしてもらおう。これについてもしっかりと拡充する、実行していくということも考えていきたいと思っております。高校との関係づくりということも大事な課題だということで、取り組んでいきたいと思っております。

いずれにしても、大学の置かれている環境というのは非常に厳しい中にあります。来年度以降、それこそ18歳人口が急減をしていくという時代でありますので、その中でいい学生を入学させ、そしてその学生に宮城県の課題というものをちゃんと理解をしてもらって、なるべく宮城県に定着をするようなことも考えつつ、よき人材を輩出することに取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしく御指導御支援のほどお願いしたいと思います。



ありがとうございました。

(中島委員長)

どうもありがとうございます。コメントにも書いたんですけども、川上理事長は非常によくや  
っていらっしゃるので、ある意味、そのまま走っていけばいいのではないかと思っているところ  
です。応援できるところは応援していきたいと思います。

それでは、事務局のほうに司会を戻したいと思います。

(司会)

中島委員長，どうもありがとうございました。

本日御審議いただきました業務実績評価の結果につきましては，大学法人に御通知するとともに，  
知事宛てに報告し，9月定例議会のほうに報告をいたします。

#### 【4 その他】

(司会)

そのほか皆様から何かございますでしょうか。よろしゅうございますか。

#### 【5 閉会】

(司会)

それでは，以上をもちまして，「平成30年度第2回公立大学法人宮城大学評価委員会」を閉会い  
たします。

大変お忙しい中，どうもありがとうございました。

公立大学法人宮城大学評価委員会（平成30年度第2回）出席者名簿

【委員】

氏名	職名	出欠
伊勢 千佳子	仙台商工会議所女性会 ビジネス・交流委員会委員長 (株式会社イトオン取締役)	欠席
伊藤 秀雄	有限会社伊豆沼農産 代表取締役	出席
齋藤 誠	東北学院大学 学長特別補佐	出席
中島 秀之	公立大学法人札幌市立大学 理事長・学長	出席
橋本 潤子	公認会計士 (橋本潤子公認会計士事務所 代表)	出席
吉沢 豊予子	国立大学法人東北大学大学院医学系研究科 副研究科長・副学部長	出席

(五十音順・敬称略)

【公立大学法人宮城大学】

氏名	職名	氏名	職名
川上 伸昭	理事長・学長	川村 保	基盤教育群長
犬飼 章	副理事長	井上 誠	アドミッションセンター長
高橋 芳行	理事（総務・人事労務担当）	蒔苗 耕司	カリキュラムセンター長・ 情報システムセンター長
西城 正志	理事（財務・施設担当）	真覚 健	スチューデントサービスセンター長
金子 孝一	理事（教育・学術情報・大学改革担当）・副学長	茅原 拓朗	学術情報センター長
徳永 幸之	理事（教育・学生支援担当）・副学長	三石 誠司	国際交流・留学生センター長
武田 淳子	理事（教育・看護教育改革担当）・副学長	富樫 千之	地域連携センター長
西川 正純	食産業学群長・研究科長	須田 義人	キャリア・インターンシップセンター副センター長
高橋 和子	看護学群副学群長	寺嶋 則雄	事務局長
平岡 義浩	事業構想学群副学群長		

【宮城県】

氏名	職名	氏名	職名
伊東 昭代	総務部長	新妻 直樹	総務部参事兼私学・公益法人課長